

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32683

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13079

研究課題名(和文) 病者の相互扶助と「下から」の社会保障構築：国際比較に向けて

研究課題名(英文) The Mutual Aid of the Infectious Disease Patients and the Formation of Social Welfare

研究代表者

有蘭 真代 (ARIZONO, Masayo)

明治学院大学・社会学部・研究員

研究者番号：90634345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：戦後日本におけるハンセン病者・結核(元)患者の集団的活動について、各地でのインタビュー調査と資料調査を実施した。

UCLAに客員研究員として滞在し、日本のハンセン病者のコミュニティについての研究報告を行うとともに、現米領・旧米領を含む東南アジアや太平洋島嶼地域のハンセン病者や結核患者のコミュニティに関する資料調査を実施した。

また、戦後日本のハンセン病療養所における集団的活動(自治会や患者運動などの政治的活動、療養所内の文化的活動、相互扶助などの生活実践)の生成・展開過程とその意味・影響について総合的に叙述した、単著『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』(世界思想社)を刊行した。

研究成果の概要(英文)： I investigated the suffering of people with Hansen's disease or tuberculosis in asylum situations under the former Japanese policy of compulsory segregation. I also examined various aspects of their efforts to overcome discrimination, persecution and alienation. I focused on communal practices involving protests against segregation and surveillance systems; the aim of such actions was to create better living conditions and opportunities for integrating with society.

My study focuses on the power of creation and liberation by describing the history of communal practices of people with Hansen's disease or tuberculosis in Japan and Southeast Asia.

研究分野：社会学

キーワード：医療社会学 福祉社会学 結核 ハンセン病 相互扶助 集団 コミュニオン 社会保障

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、人類の医療史における〈宿痾〉として社会的排除と差別の対象になってきた伝染病(元)患者らが、排除や差別のシステムをどのようにわたりあい、いかにそうしたシステムを改変してきたのかという、研究代表者のライフワークの一環に位置するテーマである。

研究代表者はこれまで、近代日本システムによってハンセン病者が排斥されてきた経験と、かれらがそれを乗り越えるべく編み出してきたさまざまな実践のありようについて、フィールドワークに基づく事例研究を積み重ねてきた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後日本および東南アジアおよび太平洋島嶼地域における病者・障害者の集団的な活動の生成・展開過程を、内在的視点から実証的に分析することによって、これら〈下から〉の集団的活動が当事者の生活や社会保障制度の構築にどのような影響を与えたのかについて考察することにある。

本研究で扱う集団的な活動は、具体的には、患者自治会や患者組織を拠点とする政治的活動、文芸や音楽など芸術作品の共同製作を行なう文化的活動、患者による生産共同体(コミュニティ)や相互扶助的な活動などの生活実践を指している。

医療社会学および社会運動史に関する一連の先行研究において、日本を含めたアジア各地の病者・障害者による集団的な活動は、「自立生活運動」や「脱施設化」など、1960年代以降に欧米から輸入された概念によってその意義が語られてきた。しかしアジア各地には、これらの概念が輸入される以前から、自生的かつユニークなカタチで、患者自身による多様な集団的活動の蓄積が存在してい

た。

戦後日本の社会保障制度の整備に大きな影響を与えた患者運動の出発点は、敗戦直後に結核療養所とハンセン病療養所で生じた患者集団による活動であった。研究代表者は、これまでの調査によって得られた知見より、終戦直後から1950年代にかけて結核・ハンセン病療養所とその周辺で展開された数々の集団的活動の蓄積こそが、病む人々に対する社会的認識の転換を促し、その後の日本の社会保障制度確立の礎を築いてきたという仮説を持っている。たとえば、1950年代に結核回復者によって形成されたコミュニティは、「全国コロニー」と名称を変えて障害者の就労の場として再編成され、現在も全国各地に存在している。また、1957年に結核患者によって提起された朝日訴訟は、生存権の内実を問い直す世論を喚起し、その後の社会保障体制の改革を促す契機となった。

したがって本研究では第一に、インタビュー調査と文献資料の探索を通して、戦後日本の病者・障害者による集団的な営みの動態とその意義を跡付け、こうした集団的活動と社会保障制度の関係を包括的に検討する作業を行う。そのうえで第二に、日本の事例研究で得られた調査結果を参考にしつつ、東南アジアや太平洋島嶼部各地における伝染病(元)患者の集団的活動の生成・展開過程と公的援助システム(共助・公助)の変容過程との関係を、各地域の具体的事例に即しながら分析していく。そして本研究を、相互扶助システム(互助)と公的援助システム(共助・公助)のよりよい関係性に向けた国際比較研究へと発展させていく。

## 3. 研究の方法

本研究では第一に、アジアのなかで戦後日本において特徴的に表れた、伝染病(元)患者による組織的形態をとった集団的活動の

生成・展開過程について分析を行った。

特に、

- (1) 療養所をめぐるどのような社会的条件の中から、患者運動が形作られていったのか、
- (2) 患者運動は、どのような要求を掲げ、具体的にどのような活動を行っていたのか
- (3) 施設当局や行政当局の側は、患者運動をどのように掌握したり圧殺したりしようとしたのか、
- (4) このような統治と実践のせめぎあいの過程で、病者と障害者をめぐる社会状況や社会福祉制度がどのように変わった（変わらなかった）のか、

といったトピックについて、結核療養所・ハンセン病療養所の元患者や元職員へのインタビュー調査と、関連一次資料の収集・分析を通して検討した。

本研究では第二に、日本と東南アジア諸地域や太平洋島嶼地域を主な対象として、明確な組織的形態をとらない集团的活動（相互扶助的な活動など）の生成・展開過程について分析を行った。結核・ハンセン病療養所の周辺には、上述のような組織性の強い集団だけでなく、地域社会のなかに療養所退所者の就労の場をつくるための活動や、生活に困窮した患者および回復者に必要資金を捻出する互助講など、インフォーマルでさらに生活過程に内在した活動が行われてきた。こうした状況は、日本とアジア太平洋諸地域にある程度共通してみられる現象である。

#### 4．研究成果

##### 2015 年度

本研究課題の申請当初は、当年度に戦後日本における伝染病（元）患者の集团的活動について、重点的調査を実施する予定であった。だが 2015 年度は急遽、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）アジア・アメリカ

ン研究学部に客員研究員として滞在する機会をもつこととなった。

このため UCLA にて、東アジア・東南アジアにルーツをもつ多様な人文・社会科学分野の研究者と日々交流しながら、日本のハンセン病者の歴史やコミュニティについての研究報告をおこなうとともに、東南アジアや太平洋地域におけるハンセン病者や結核患者のコミュニティにかかわる資料調査を実施した。

UCLA の Southeast Asia Studies Center をはじめとする各地域研究センターや、同 Southern Library をはじめとする各図書館において、一次資料を探索する過程で、東南アジアや太平洋島嶼地域におけるハンセン病者や結核患者のコミュニティの歴史は、環太平洋規模におよぶ 20 世紀米国（アメリカ帝国）の医療・衛生戦略の展開のなかで捉えられねばならないことが明らかになった。

##### 2016 年度

上記 2015 年度の在外研究中に、これまでの調査研究結果を単著として刊行する計画が具体化した。このため 2016 年度は単著をまとめる作業に傾注した。同書では、戦後日本のハンセン病療養所における集团的な活動（自治会や患者運動などの政治的活動、療養所内の文化的活動、相互扶助などの生活実践）の生成・展開過程について詳述したほか、これらの活動・実践が療養所入所者自身の生活の改善や療養所システムの再構築に与えた意味・影響について、綿密な分析をおこなった（後述のように 2017 年度初頭に、単著『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』を刊行した）。

並行して、戦後日本における伝染病（元）患者の集团的活動について、東京の多摩地域と九州の福岡地域を中心として、本格的な調査を開始した。

2017 年度

2017 年度は、戦後日本における伝染病(元)患者の集団的活動について、全国各地でのインタビュー調査と文献資料調査を実施した。

さらに 2017 年度には、2015 年度に客員研究員として滞在していたカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)におもむき、テラサキ日本研究センターが主宰する "4<sup>th</sup> Trans-Pacific Workshop" にて、"Formation of the Social Movements in the National Sanatorium for Hansen's Disease in Japan" と題して、ハンセン病者の管理・コミュニティ・社会運動の日本の特徴について研究報告をおこなった。また、UCLA の各地域研究センターや各図書館において、東南アジア、米領ハワイ、旧米信託統治領ミクロネシアのハンセン病者や結核患者のコミュニティにかかわる資料調査を実施した。

また、2017 年度初頭に刊行した前記の単著『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』(世界思想社)は、「紀伊國屋じんぶん大賞 2018」の第 7 位に入選したほか、新聞・書評紙・学会誌で多数の書評を得るなど、社会学にとどまらないアカデミアから高い評価を受けることができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

有園真代「この島の土になる 解毒剤としての社会調査」『現代思想』45 巻 21 号、青土社、180-193 頁、査読無、2017 年。

有園真代「施設で生きるということ 施設生活者の戦後史からみえるもの」『世界』10 月号、岩波書店、49-55 頁、査読無、2016 年。

〔学会発表〕(計 2 件)

Arizono, Masayo (招待講演) "Formation of the Social Movements in the National Sanatorium for Hansen's Disease in Japan", The 4th Trans-Pacific Workshop, June 2017, University of California Los Angeles, CA, USA, June 2017.

Arizono, Masayo (招待講演) "Asylum and Resistance", Workshop for Dr. Masayo Arizono's Articles, Terasaki Center for Japanese Studies, University of California Los Angeles, CA, USA, March 2016.

〔図書〕(計 3 件)

有園真代『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』世界思想社、総 213 頁、2017 年

有園真代「生存権、コミュン、そして詩 1950 年代の療養所サークル」宇野田尚哉・川口隆行・坂口博・鳥羽耕史・中谷いずみ・道場親信編『<サークル誌の時代>を読む 戦後文化運動研究への招待』影書房、241-244 頁、2016 年。

有園真代「福岡コロニーを拓いた人々」福岡市博物館市史編纂室編『新修福岡市史 民俗編 2』765-778 頁、2015 年。

〔その他〕

「紀伊國屋じんぶん大賞 2018」第 7 位入選 (有園真代『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』世界思想社、2017 年、により)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

有園真代 (ARIZONO, Masayo)

明治学院大学・社会学部・研究員

研究者番号：90634345